



三つの縄文遺跡を有する

広域の地区

四万十町  
町内ぶら～り散策

とお わ かわ ぐち  
十和川口①



## 長沢川が四万十川に注ぐ「河口」

十和川口地区は広い。十川の街の西端を流れる長沢川の西側一帯が十和川口である。この長沢川が四万十川に注ぐ「河口」であったことからその名になったとされる。この河口から国道を西へ。道の駅とおわを過ぎトンネルを抜けた、四万十川を渡る手前の右側の町境まで地区は続く。道の駅の北側斜面の山の向こう側にも小さな集落がある。

## 「かわびら」と「かわひら」

地区は四つの組で構成されている。長沢川河口周辺を川平組、道の駅に向かって行くと、今成中組、下組。川平へ戻り十川小・中学校を右手に見つつ橋の手前を左折し山裾を行くと奥組である。山裾の道と別れ、山へ入る道を登って行くと「吹藪」という小さな集落がある。ここは、前述の「道の駅の北側斜面の山の向こう側」にあたる。吹藪から道の駅がある今成へ下りる山越えの道は今も使われている。

ところで、十川の街に隣接している長沢川河口辺り、つまり地区の東端が川平組と書いたが、地区の西端、四万十川を渡る直前の町境右手にも、組名ではないが川平という地名がある。十和川口地区の東端と西端が、面白いことにどちらも川平なのである。東の川平は「かわびら」で、西は「かわひら」と読むらしい。

## 地区の先人たる縄文人に想いを馳せる

昭和61・62年、長沢川最下流に位置する「かわびら」の河岸

で発掘調査が行われ、縄文後期の土器片や石鍬などの石器、さらには耳飾りなどの装飾品が大量に出土した。これは前号の「十川・中心部」で記した十川駄場崎遺跡の対岸にあたり、川口ホリキ遺跡(駄場崎B地区遺跡)と名付けられた。また、その数十メートル北に位置する場所(十川中学校辺り)でも遺跡が確認されていて、川口新階遺跡という。さらに、現在道の駅とおわがある辺りからも縄文遺跡が発見されている。今成遺跡である。今成は、江戸期の地検帳では川口村に含まれてはいるものの、今成村という項目があえて設けられていることから、当時から今成は一定の人口を有する集落であったことがうかがえる。江戸期どころか、遥か昔の縄文後期から、ここで人が生活し、集落を形成していたことを遺跡が証明している。これらの遺跡から、縄文人が暮らしていた十和川口の様子を想像してみるのも面白い。



川口ホリキ遺跡(駄場崎B地区遺跡)周辺

### 町のうごき

(8月31日)	人口	前月比	出生	死亡	転入	転出
男	7,256	-18	男 1	16	13	16
女	7,812	-19	女 4	18	10	15
計	15,068	-37	計 5	34	23	31
世帯数	7,996	-12	(8月中の届出)			

窪川地域 10,738人 大正地域 2,065人 十和地域 2,265人

※前号の「十川駄馬崎遺跡」について:「駄場」と書く記録の方が多いため「十川駄場崎遺跡」に訂正いたします。

四万十町通信

2024.10月号  
Vol.223 (毎月10日発行)

●発行/四万十町企画課 ●印刷/弘文印刷

〒786-8501 高知県高岡郡四万十町琴平町16-17

☎(0880) 22-3124

FAX(0880) 22-3123

UD FONT  
by MORISAWA

本文など内容の一部に見やすく読みまちがえにくい  
ユニバーサルデザインフォントを採用しています。